

ケアンズ・基礎体力編、ジャカルタ・テニス編に続く、合宿シリーズ第三作目、【合宿へ行こう~与那国・トライアスロン編】である。もちろん一人合宿であるが……。

実は、不本意ながらこうなってしまったのだ。

本当は【街へ行こう~魅惑のマニラ美女・夜の歩き方編】というタイトルだったのだが、よんどころ無い事情で、マニラ行きのチケットをキャンセルすることになって、キャンセルしたはいいが、直ぐにどこかの外国に行こうと思ったら、むちゃくちゃ高いチケットの壁に阻まれて、やむなく伝家の宝刀 JAL マイレージを使うことになってしまった、という訳である。

で、マイレージを使うなら一番遠いところへ行ってやろうという事になって、日本の一番西の与那国になった訳である。

だからタイトルも【街へ行こう~魅惑の与那国美女・夜の歩き方編】でもいいのだが、はっきり言って、与那国は“街”ではない。

さらに人口1000人のこの島には、たぶん500人もの女性がいるはずであるが、不幸にも与那国美女にはほとんど出会えなかった。



日本最西端の石碑。この小学生が卒業記念に寄贈したものらしい。君たち偉い！

実は、今の日本の離島には、フィリピンを中心にたくさんの女性が出稼ぎに来ているのである。

因みに、鹿児島島の屋久島ですら何人かの美人マニラ女性がいることを私は知っている。

この与那国にいながら、得意のタガロク語ポディータッチ、いやポディーランゲージを駆使しながら、もしかすると【街へ行こう~魅惑の与那国マニラ美女・夜の歩き方編】が実現しないでもないと思ったのだが、夜の与那国で会うのは何故か埼玉、千葉、神奈川などからの出稼ぎのオネーちゃんばかりであった。

おかげで日本の一番西にいながら、思いっきり関東のローカルネタに終始してしまった次第である。

そして与那国では、歩かずにほとんど自転車で移動していたので、すっかり汗臭い【合宿へ行こう~与那国・トライアスロン編】になってしまったのである。

トライアスロンには、ラケットもボールもイブラヒムも必要ではなく、海と自転車と道があれば成立してしまうスポーツなので、何も与那国で合宿せずとも全くよいのだが、与那国に20日もしなければならぬチケットをゲットしてしまってから、さて、与那国には何があるんだろうと調べ始めたところ、“特に何も無い”という事を知ったのだった。

『与那国は実に良かった』とコメントしていた友人に慌てて確認すると、友人はわずか3日間の滞在だったということを知ったので、慌てて自転車だけは取りあえず与那国に送った次第である。

## 一番西の島

日本の一番西ってすごいのである。台湾までなんとたった 100 キロ。沖縄のかなり先の石垣島までも 100 キロである。東京までだと何と 2000 キロ。

年に何回か、与那国から台湾が見えるそうだ。私が滞在していた時も、雲かな、台湾かな、という感じの影が見えていた。

さすがに一番西だけあって、台風の後などは、いろいろな鳥や虫がやってくるそうだ。

特に問題なのが柑橘類を食い荒らすミバエ。現在はマレーシアミバエというのが時々来るので、その対策に、放射線を当てたミバエの幼虫を放っているそうだ。あれってセシウム 137 だったかな。

近くの島まで 100 キロ、というのは絶海の孤島である。世界で最も絶海の孤島となっている島はイースター島で、飛行機で何時間分も離れているらしいが、この 100 キロだってすごい。



さすが与那国。いろいろな“ミバエ”が来るらしい。放射線を当てたマレーシアミバエの蛆虫をつるすバケツ。

おかげで与那国は風が強い島なのであった。

沖縄電力の巨大な風車が 2 棟立っている。台風が近づいているせいか、ビュンビュンと音をたてて回っている。何も知らない野鳥が羽にあたって激突死しているのが痛ましかった。

## お墓作り

慌てて自転車を送った為に、人間は先につき、自転車はなかなかやってこないことになってしまった。

暇そうにしていると宿の主人から、親戚がお墓を作っているので手伝ってくれないか、というお願いが。

沖縄のお墓は巨大である、という事は、【ちゅらさん】という、沖縄の学術・文化資料を見ていて知っていたのであるが、あれを手作りするなんて事は出てなかったぞ。

この島の中で最大の霊園～墓がでかいから、霊園もでかい～の中にある施工場所に行ってみると、どさっと積まれた生コンを、オジイが一人でスコップを操り、荷車に載せ、それを施工場所に運んで、さらに平らにならしていた。

これを見た瞬間、『おおっ、自分の墓を作る男』と不謹慎にも思ってしまっただが、そうではなく、あくまで先祖の墓だという。



コンクリートの土台に 2 重の木枠を立て、そこに生コンを流し込む仕組み。その中には鉄筋を入れる。

土台用に2立方メートルも生コンを買ったらしい。照りつける太陽で乾き始めているどころか、おいおい固まり始めているじゃないか！

宿の主人は急いでブルドーザーを取りに行く。私はその間、及ばずながら、オジイの手伝いをする事に。

“合宿”とタイトルが付いているにふさわしく、無茶苦茶ハードな作業だった。

生コンって重い。ほんとに重い。

シャベル一杯に積むと、持ち上げるのが辛い。これを荷車に載せて運ぼうとすると、荷車がふらふらする。オジイは平らにする作業をどんどんと進めている。こちらのペースがだんだんと遅くなっていくのを、腰を伸ばして待っている様になった。

しかし年齢を考えると、交代してくれとも言えない。

しかし何でこんな重労働を、はるばるやって来て作業しているんだろう、と思わなくもない。10分で手に豆が出来て15分で、そいつがつぶれた。ジャカルタでラケットを握っていた右手は何ともないが、鍛えていない左手には5ヶ所から血が出てきた。

沖縄のオジイは寡黙で辛抱強いというイメージがあるが、実にそのとおりである。

生コンのタイムリミットがあるせいか、一切休まずに作業を続けて、私もふらふらになってしまった。

そんな頃、宿の主人のブルドーザーが到着。初めからこれを使ったら良かったのに…。

このオジイは現在74才だそう。68才まで漁師をしていたらしい。与那国はカジキマグロの漁獲高が今でも県内一。

でもオジイはカジキだけは狙わなかったと。あれは実に危ない仕事だという。船にあげて死んだと思っても、バンと暴れまわる。怪我をする漁師も多いらしい。

神奈川から来たというと、嬉しそうに『ワシは静岡までは漁で行った事があるよ』と言っていた。



74才のおじい。暑い中、長袖長ズボン。全く汗をかかないみたい。で、すごい元気で働き者。

今作っているお墓は、やはり自分のものではなく、先祖のお墓らしい。しかも先祖の墓は何ヶ所もあって、近い将来、自分の子孫が、もうどの墓に参ったら良いのかわからなくなるだろうから、1つにまとめているのだそう。

自分の息子達は与那国から出てしまっているとのこと。子孫ではなく、他人の私が手伝うってのも不思議だが、その後も自転車が届くまで手伝う事になったのだ。

自分の息子達は与那国から出てしまっているとのこと。子孫ではなく、他人の私が手伝うってのも不思議だが、その後も自転車が届くまで手伝う事になったのだ。

## 合宿生活

一泊素泊まり 2000 円という宿に泊まりながら、水泳、自転車、ランを毎日やる。今回の重点は訳あって自転車。丁度この与那国は、絶海の孤島にふさわしくアップダウンの激しい島であった。

冬には与那国マラソンというがあるらしい。与那国の周回コース 26 キロを走る。心臓破りの坂なんかがあって、毎年けっこう盛り上がるらしい。

ただ最近、その外側に一部分新しい道路が出来て、そちらを回ると 30 キロ弱になるらしい。その新しい道路とは、牧場の中にできたもので、人や車よりも、牛やウマが多くいる。

当然、ウンチやおしっこもしている。最近はず雨が全く降っていないので、スピードを出して乗りあげてしまうと危険だったりする。



与那国のウマは有名らしい。でも痩せていて、体も小さく貫禄はない。きれいな道路にウンチするし。

最初は右回り、二周目は左回りなどと気分を変えてみるが、きついものはきついんだなあ。でも車の数が少なく、天気も良く(因みに殺人的に天気がいい)、風も強めなので本当に気持ちがいい。自転車が好きな人にはお勧めの島である。

ただ、温泉がないので、私としては屋久島の方が良かったが。

海はさすがにきれい。トライアスロンと言いながら、今日はシュノーケルでいくか、と潜ると、魚がたくさんいる。

与那国というと、海底遺跡が有名である。あまりに神秘的と聞いていたのでダイビング器材をもって来ていたが、実際に与那国に来てみると、『う~ん、まあよくわからんよ』という人が多くて、何だか冷めてしまったので結局行かなかった。

でも、冬場に見れるサメはすごいらしい。

## 与那国という島

与那国は、沖縄であって沖縄じゃないと感じる部分がある。

愛嬌があって、世話好きで、時にはおせっかい、という沖縄の雰囲気はあまりない気がする。

島全体が、どこか置き忘れられてしまっているような雰囲気を感じた。

まあ、これは恐らく観光で生きている島ではないからだろう。先にも書いたが、人口 1000 人である。しかし、与那国町なのである。人口 4 万人の石垣は石垣市というのは納得できるとして、人口 2400 人の西表島は、周辺の島々を合わせて竹富町となっている。

つまり与那国町は、立派に独立しているとも言える。

この島には泡盛の工場が 3 つもある。因みに西表島には、西表という泡盛はあるが瓶詰めだけだから格が違う。

それから何と言っても漁業。港にはたくさんの漁船がある。

どうもウミンチュが多いせいか、飲み屋の数が多い。

私の知る限り、西表島にはカラオケっぽい飲み屋が 1 軒あるだけだ。でもここ与那国では、本格的なスナックが、そう少なくとも 25 軒以上ある。

人口に占めるスナックの数、という統計があったら、間違いなく日本一という勢い。だから関東から来る出稼ぎのオネーちゃんも多いのだった。

## クブラバリ

与那国には【クブラバリ】と呼ばれる断層がある。全長 15 メートル、幅 3.5 メートル。

風光明媚なところだが、このクブラバリには悲しいストーリーがあるのだった。

その昔、琉球王朝は、それまでの貢納制度を改め、15 歳以上の男女全てに課税する制度を導入した。世に言う人頭税である。

そのルールは、この与那国にも及び、過酷な取りたてが行われたそうである。

島では人口抑制の為、村々の妊婦を集め、この岩の割れ目を飛ばせた。

妊婦は必死の思いで飛んだが、多くは転落死したり、流産したと語り継がれている。

この割れ目の、一体どの辺を飛ばせたのか分からないが、最も簡単そうと思われるところであったとしても、たいへんな事だ。

男性の私でも、実際に飛ぶとなるとたいへんな勇気がいる(というか、試しにでもやらない)。

本人もそうだが、家族はどんな思いだったのだろうと悲しくなってしまう。



クブラバリの割れ目。妊婦にここを飛び越えさせるなんて、人は時として残酷なことをするもんだ。

## Dr.コトー

私が放浪している間、日本では Dr.コトーという番組があったそうだ。白い巨頭の放映前で、同じ時間帯にやっていたらしいので、ゴールデンタイムである。私は島に行くまで詳しく知らなかったが、割とヒットしたらしい。

番組では【与那国島】とはなっていないが、撮影現場はまさにこの島で、診療所、漁協、海沿いの道が頻繁に出てくる。

診療所は、与那国町の土地に、セットとして新しく建てたそうだ。でも新しいと困るので施工した土建屋さんは苦勞して古く見せる努力をしたらしい。

その担当は若手で、その時、親方は出張で島を離れていた。

親方はあまり事情を知らずに、その施工現場へ行って、あまりにぼろぼろなので、『バカヤロー、こんな風に作りやがって』と怒ったという伝説があるそうだ。



Dr.コトーで、泉谷茂が良く出てくる漁協。カジキマグロの漁獲量は県内一らしい。

診療所にはほぼ毎日行って見たが、たしかに去年作った建物とは思えないくらい良く出来ていたなあ。

診療所の入り口には、『再び撮影で使うので、壊したりしないでください』という立て看板が立っている。そしてその通り、私が行った翌月から、再び撮影が開始されるらしい。ちょっとずらせば良かったかな。

## ハーリー

この島の一大行事の1つ、ハーリー大会があった。島には大きく3つ集落があって、一番大きな租内という集落は、主に商業と農業、そして2番目に大きい久部良は、漁業の集落である。そしてこのハーリーは、漁師のお祭りなので、中心は久部良の人たちである。久部良の集落を、北、中、南の3つに分ける。そして船に乗って競い合うのである。これがメインイベント。もう殺気立つほどの集中と興奮ぶりである。

この他にも中学校レース、年代別レースなどがある。



ハーリー大会の前夜祭？ 与那国では、大きく3つの地区に分かれて競い合っている。島の一大イベントらしい。

さすがに一大イベントだけあって、一週間前にはかなり本格的な練習が始まる。中学生などは、体育という名のものに、昼間からバスで港に乗り付けては徹底的な指導を受けている。ましてや漁師に至っては、もう漁には出ない。島には刺し身が無くなってしまう。店の主人がハーリーに乗る場合はお店までお休み。毎日練習して、夕方にはチームの呼吸あわせなのか、みんなで一杯やる。久部良には食堂が少ないのに、お休みになってしまっていて困った困った。

前日には派手なお祭り。明日、猛烈な試合があるのに、飲んで大丈夫か？ というほど泡盛で盛り上がっている。因みに、与那国の泡盛は、日本最高の60度だったりする。

この日はかなり遅くまで音楽が流れて盛り上がっていたようだ。

後で聞いたところによると、昔は前日にライバルの船に細工することがあったらしい。そしてその警備の為に、誰かが寝ずの番をしていたという。ご近所でそこまでやるかね、しかし。

当日の港は朝早くからとても賑やかだった。

次々に各種目がスタートする。中には転覆ハーリーというのもあって、レース中、合図に従って一斉に船を転覆させる。そして船を起こし、再び漕ぐというもの。転覆はいいとして、起こすのがなかなか難しい。起こしてから、漕ぐ人と、船の水をかき出す人の連携プレーが重要みたいだ。

40代、30代、20代の世代対抗戦。何故か結果は40代、30代、20代の順。若者どうしたという感じ。

さて、注目の地区対抗戦。中地区の3連覇が懸かっている。パンという音と共に各船一斉にスタ

ート。400~500メートル先の旗を折り返し、スタート地点でまた折り返すというコース。トータル約2キロ。この日、沖縄各地でハーリー(もしくはハーレー)大会が行われているのだが、各地によって、その距離は違うみたいだ。

結果、中地区の優勝。3連覇。後で聞くと、中地区は、船の漕ぎ方が違うのだそうだ。何が違うのかさっぱりわからなかったが。

与那国の合宿に飽きたので、翌日西表島に移動した。西表でも同日にハーリー大会があって、ユースホステルに泊まっていた連中で大会に出たらしい。観光客でも出してくれる大会があった。出てみたかったなあ。因みに、結果はユースホステルチームの圧倒的惨敗だったらしい。

西表島でも石垣島でも、結構まじめに自転車を漕いだ。1日100キロ近く。これにはちょっとした狙いがあった。

つづく